

あ と が き

芳 賀 徹

一九九五年十二月、国際日本文化研究センターは、北京大学と共催で、日文研としては初めての海外における日本研究国際シンポジウムを行なった。

日文研はその名に「国際」の字をもっており、国際的視野のなかで日本の文化と社会の過去・現在を再検証し再批判することをその本来の使命としている。そのため所内には世界各国から常時十五名余の優秀な日本研究者を客員教授、助教授として迎えて、半年ないし一年間、親密な研究の交流を深めているが、その他にも海外の学者を加えての共同研究や大小のセミナーは、毎月毎週のように催されている。

だが、最近の世界各地での日本研究のめざましい展開ぶりを見ると、右のような所内での交流だけではとても十分とはいえない。さらにこちらから出かけて行って、海外の拠点研究機関で現地のさらに多くの研究者と接触し、日本研究以外の隣接分野の学者たちとも交流して、海外現地からの日本像と海外学界における多様な研究動向とを直接に学びとることが緊要である。これはまたその国の日本研究者たちへの、当方からの激励や刺激となりうるものでもあろう。

そのような意図のもとに梅原猛前所長の退任前に計画され、資金や会場や参加者についての幾たびかの折衝のちに意外に早く実現されたのが、上記の北京シンポジウムであった。日文研側では私とその実行委員会の委員長に任ぜられた。

開催場所としては、日本研究者の数が多く実績の豊かな天津の南開大学も当然考慮されたが、中国側参加者にとっての便宜のよさその他さまざまな歴史的経緯から北京大学ときまり、同大学の日本研究中心（副主任兼秘書長賈惠萱教授）が当方の実務上のカウンターパートとなることを引き受けてくれた。

共同主題は「東アジア近代化の指導者たち」ときまった（中国側では「指導者」という語には特別の重い意味があるとのことから、これを避けて「東亜近代化歷程中的傑出人物」となった）。「近代化」は、いまから三十年前、一九六〇年代に日米の学界間ですでに大いに論議された歴史概念で、日本国内ではやや新味に乏しいかもしれないが、日中間で考えればなお相当に知的・心理的刺激をはらみうる問題である。私はこれを大まかに「十九世紀半ば、アヘン戦争の当時から日清・日露両戦争をへて辛亥革命（1911）ないし五・四運動（1919）にいたるまで、西洋列強の強大な圧力のもとに、東アジア諸国の政治と社会と文化に生じた急激な変化の過程」とし、この圧力と衝撃に各国各分野の指導的人物はいかに対応し、いかにして自己変革を進めようとしたか、この問題を日中それぞれに個別ケースに即して報告し、討議することを提案し

たのであった。

十二月四日（月）から七日（木）まで、冒頭の公開基調講演につづいて全七セッション、日中八名づつ計十六名の講演・報告と、それをめぐる討論は、毎回三十名ほどのオブザーヴァーの参加をもえて、大いに充実したものとなり、ときに白熱もした。今回のテーマが中国側に対してはたしかに一つの新しい知的刺激となりえたらしいのだが、それにはそれなりのいくつかの理由のあったことが考えられる。すなわち一つには、「近代化」は今日の中国においても「現代化」と語を変えて、なお続行中の切実な国家的問題であること。二つには、それなのに十九世紀後半以来の中国「近代化」の歴史は、日中戦争と革命につぐ革命の波瀾のなかでその評価のゆれがはなはだしく、なお十分に客観的に検証されたとはいえない状態にあること。三つには、その歴史を今回は「近代化」の概念規定などをめぐる抽象論議に拡散させないように、「傑出人物」をとりあげてもっぱらその思想と行動をめぐる考察に集中させることとしたこと、などであろうか。

初日の開会式では、まず日文研河合隼雄所長と北京大教授・日本研究中心主任王学珍氏が、それぞれ本シンポジウムの意義を強調する挨拶を行なった。すぐつづいて、基調講演として、私が「岩倉使節団の米欧回覧と日本近代化」について報告したのに対し、日中交流史の王曉秋教授（北京大）は「中国近代の先駆者たちの世界認識と中国近代化」と題して、魏源、郭嵩焘から康有為にいたる思想家たちの、アヘン戦争以後の危機感のなかでの新しい世界像形成の営みとそれによる清朝旧体制に対する批判の運動を、さすがに鋭くあざやかに描いてみせてくれた。

各セッションには毎回、日本側・中国側両方から座長が一人づつ出て、ときには通訳も兼ねてまとめ役を勤めたのだが、それらの人も含めて中国側からは計九名の日本学専門家が直接に討議に参加したことになる。しかもそのなかの六名（王曉秋、王家驊、王勇、嚴紹璽、劉建輝、賈惠萱氏ら）は、客員教授その他の身分で日文研で長期・短期の研究生活を経験した人々であったことが、今回のシンポジウムで相互の意思疎通を円滑にするのに大いに貢献する結果となった。それに対し日本側では井波、竹内の両氏のみが中国学専門で（ただしアメリカ育ちの比較科学史の栗山氏は、中国をもその研究対象に入れており、今回は流暢な中国語で杉田玄白を語って、中国側の喝采を浴びた）、あとは私をも含めて日本学ないし比較日本研究の専門の者であったのは、今回の予算規模の制約からいっても、シンポジウムの趣意からいっても、やむをえない、というよりは妥当なところであったろう。

中国側の報告は、日本側参加者にとって、その多くがまことに新鮮で、知的刺激に富んでいた。蕭教授の北京大學学長蔡元培に関する発表は、今世紀初頭の中国のはげしい動揺のなかで高等教育と大学制度の改革に斬新な理念と縦横の機略を発揮し、北京大を新文化運動の発進基地とした大学者の人物像を伝えて、そのような中国もあったことをあらためて強く思い起こさせてくれた。そして周教授の清末民初の中国実業家たちと日本とのかかわりについての報告にせよ、錢教授の思索者魯迅についての報告にせよ、さらには劉助教授の、いつものように周到綿密な調査と分析にもとづく「清末・民初の中日交流」とそれによってかたち作られた相互の映像に関する発表にせよ、いずれも私たちに、あらためて近代の日中間の抜き差しならぬ交錯・

競合関係の存在を痛感させてくれたのである。つまり、日本と中国における近代化運動は、よきにつけ悪しきにつけ相互に深くからみ合い、相互にたえず強く作用しあいながら、同時に平行して進行したという事実である。

だから、私が本シンポジウムの趣意説明として、日中の「近代化」を指して「西洋列強の強大な圧力のもとに…生じた変化」と述べたのは、すでに若干の脆弁めいたものを含んでいたことにもなる。日清・日露の戦争から対華二十一ヶ条要求（1915）あたりまでを考えたみだけでも、数歩先んじて近代化を達成した日本が、同時代中国の近代化運動に対して「西洋列強」と並ぶ、ときにはそれ以上に苛烈な「圧力」や干渉を加えつづけたことは、明らかだからである。だが、この点に関して、今回は近代日本の行動の道徳的「善悪」を直接に問責するといった方向に議論が進むことはなかった。

ただ、竹内実教授の報告で、吉田松陰の書簡の一節が引かれたなかに、中国大陸併合を意味するような彼の大言壮語の類があった。それをめぐって、王家驊教授から後年の日本人の侵略主義の萌芽を指摘する発言があったりもした。しばし応酬がつづいたが、日中双方言うべきことは互いに言い合って、かえって相互の理解は深まった。

この種の問題も含めて、近代の日本と中国の間には、なお相互の関連について闡明すべき課題が山のように残されている。これにさらに同時代の韓国、ロシア、あるいはイギリス、アメリカの動静を関連させて考察の場をひろげれば、「東アジアの近代化」の問題はなお一層の複雑さと立体性を増すとともに、むしろ相互に一段と公平な歴史的評価を促すこととなるかもしれない。今回はまだほとんど触れられなかった曾國藩、李鴻章、西太后などから袁世凱、孫文にいたる中国の政治指導者たちへの評価、歴史的な位置づけの問題をも含めて、近い将来ぜひさらに親密にして真摯な第二回東アジア近代化研究拡大セミナーを催してみたいものである。

また忘れずに附言しておかなければならないのは、基調講演および全セッションを通じて、日中両語間の通訳に当たってくれた若手研究者たちのごような活躍ぶりである。北京大側からは専任講師クラスの人たちが約三名、日文研側からは博士課程学生（当時）銭国紅君（南開大学歴史学博士）が、報告原稿のあるなしにかかわらず、高度に専門的な発表と討議のすべてを逐次通訳してくれたのだが、おかげで日中間に意思疎通を欠くことはまったくなかった。このことは中国における日本研究の最近の進展を示すもっとも確実な証左とさえいえるかもしれない。

なお、この北京シンポジウムのごく小規模な継続的展開として、一九九六年一月十二日、十三日の両日、日文研で、同じく「東アジア近代化の指導者たち」と題するセミナーを催した。その発表者、参加者を以下にあげておくと――

嚴安生（北京外語大、日文研客員教授）

「郭沫若と陶晶孫－日中間の明暗」

ヴィン・シン（カナダ、アルバータ大）

「グエン・チュン・トーとヴェトナムの近代化運動」

徳盛誠（東大）

「〈豪傑〉としての海保青陵－〈近代化〉に向けて」

金泰俊（韓国、東国大）

「兪吉濬と朝鮮近代化」

銭国紅（日文研）

「魏源の《海国図志》と日本」

芳賀徹（日文研）

「下関の日清対決－伊藤博文、陸奥宗光と李鴻章」

他に討論参加者として、劉岸偉（札幌大）、劉建輝（北京大）、リース・モートン（オーストラリア、ニューカッスル大、日文研客員教授）、ジェイ・ルービン（ハーヴァード大、日文研客員教授）氏らがあり、全報告を通じてきわめて密度の高い討議が行われた。このセミナーではとくにヴェトナム（ヴィン・シン）、韓国（金泰俊）からの報告を得たことによって、いよいよ「東アジアの近代化」は、少くとも東アジア諸国間の交流・相互触発の関係を一層広く深く見なければ立体化されてこないことが納得され、一同深い感慨を得たのである。

追記 中国語原文からの印刷は苦勞が多いと聞いている。それでも誤字誤植がある場合には、ご理解のうえお許し願いたくこれを付記する。